KANAGAWA

NEWS LETTER 2007. 1. No. 32

〒221-8686 横浜市神奈川区六角橋3-27-1 電話 (045)481-5661(代) 神奈川大学言語研究センター

言語研究センター報告

松 村 文 芳

いつも言語研究センターの施設をご利用頂きありがとうございます。本年度最後の運営委員会が無事終わりましたので、本年度事業の中間報告をいたします。経常予算による事業については来年度総会において報告しますので、ここでは新規の施設関連の報告をいたします。

本年度もLL教室のCALL教室への転換を実施しました。設備はすでに多くの先生方にご利用頂いておりますが、ここで改めてご紹介いたします。

教室は318室を318A室、318B室とし、319室はそのままです。定員は318A、318B室が32名、319室が64名です。三室すべてが同一の設備を備えています。

まずそれぞれの教室は従来のカセットデッキに相当する、リスニング・ステーション（アンペール社製）を備えています。この装置はカセットテープを使用しないでカセットテープと同じ学習ができるものです。CALLシステムを利用されない先生方が利用されます。

第二はCALLシステムです。各教室に同一のシステム（ビクター製）があります。従来のCALLシステムの機能以外にストリームビデオ映像（MPEGファイル）が簡単に学生ブースに転送可能な最新のシステムです。すでにCALLシステムを利用されている方も、これから利用される方も使用法は簡単ですので、是非言語研究センターの職員・スタッフの皆さんに声をおかけください。

第三はビデオ・オン・デマンド（VOD)システムです。VODはソフトの不足とCPUの高速化の遅れにより、従来人気がありませんでしたが、我がセンターでは各教室で快適にご利用いただけます。120分くらいまでのVHS、S-VHS、DVDのソフトをMPEFG1ファイルに変換して、サーバーに保存し、それを学生側からCom-Playerというソフトを介して学習します。なおストリームビデオのMPEG1では「早送り」、「早戻し」ができませんでしたが、当センターではMPEG1をMPEG4に変換していますので、「早送り」、「早戻し」も可能です。既に当センター制作の試用ソフトが百数十本インストールされていますので、お試しください。

これで昨年度設置した302CALL教室とあわせると合計4室がハードLL、CALL、VODの機能を備えた教室になりました。従来からある314CALL教室も多くの先生方にご利用いただいています。

CALL教室はご存じのように多くの精密機器により構成された複雑な施設です。先生、学生の皆様に快適に使ってもらうためには、常時言語研究センターの職員・スタッフによる丁寧なメインテナンスが必要です。従って授業終了後の施錠等でご迷惑をおかけしますが、事情ご高察の上、今後ともよろしくご協力のほどお願いいたします。

講演会

言語学におけるコーパスの位置づけ

—コーパス言語学の現状と今後の展開—

富　谷　玲　子

今回の講演では、現代の言語学において重要な役割を持つ「コーパス」（大規模な言語データベース）をめぐって、言語学におけるコーパスの位置づけや、コーパスを使った分析の具体例などが紹介された。講師には、現在コーパスの構築作業に携わっている、国立国語研究所の丸山岳彦氏をお招きした。講演の主なテーマは、(1)「言語学におけるコーパスの位置づけ」、(2)「『日本語話し言葉コーパス』の紹介」、(3)「KOTONOHAプロジェクトの概要」であった。

「コーパス」とは、言語研究に用いることを目的として編纂された、大規模な言語データベースのことである。「コーパスに基づく言語研究」という考え方自体には、すでに50年以上の歴史があるが、特に1990年代半ば以降は、コンピュータの高性能化と爆発的な普及を契機として、大量の言語データから一定の傾向や規則性を見出そうとする研究が盛んに行われるようになった。「コーパス言語学」と呼ばれるこの研究分野は、コーパスが早期に整備されたイギリスによって主導されてきた。日本ではコーパスの整備が遅れたことから、日本語を対象としたコーパス言語学は完全に立ち遅れている状況にある。講演では、まず、20世紀における言語学の動向と、その中でのコーパスの位置づけについて、概説が行われた。

次に、国立国語研究所が2004年に公開した『日本語話し言葉コーパス』が紹介された。これは、661時間もの自発的な話し言葉を録音し、テキスト（文字）に書き起こした上で、品詞情報など様々な研究用情報を付与したものである。講演では、『日本語話し言葉コーパス』を用いた音声現象の分析例や、話し言葉の構造をどのように記述・解明していけばよいかなどについて、「ら抜き言葉」の使用実態、「～ですね」の使用実態に関する分析など、具体的で興味深い研究成果の紹介があった。

最後に、現在国立国語研究所が進めている「KOTONOHAプロジェクト」についての概説があった。この研究計画は、現代日本語の書き言葉をバランスよく集めた「均衡コーパス」を作るという、日本では初めての試みである。研究期間は2006年から5年間で、コーパスの規模は1億語を目指すという。

実際にコーパス構築に関わっている現役の研究者を招聘することにより、コーパスがどういうものか、どのように構築し、どのように使うのか、などといった具体的な情報が豊富に示され、今後のコーパス研究への期待を高まらせる講演となった。当日は学生・教員合わせて約50名もの出席があった。特に学生にとっては未知の新領域に関する高度な内容であったが、具体的で興味深い研究成果が次々と紹介されたため、最後まで熱心に聞き入っていた。講演終了後も内容の濃い質疑応答が続き、盛況な講演会となった。講師の丸山氏は本学の卒業生である。この講演会では研究者として第一線で活躍中の先輩から、研究の最前線について直接お話聞くことができたが、これは言語に関心を持つ学生にとって非常に大きな刺激になったものと思われる。

シンポジウム

「ロシア語教育の現在と未来」

堤　　正　典

このシンポジウムは2006年12月16日に神奈川大学横浜キャンパスで開催された。ロシア語教育を多角的に討論し、情報を交換する目的で、4名による報告とそれに対する質疑応答の他に全体討論の時間を設けた。報告は、臼山利信氏（筑波大学大学院人文社会科学研究科助教授）の「大学間交流とロシア語教育 ―筑波大学の取り組みを事例として」、竹内敦子氏（関東国際高等学校教諭）の「関東国際高校でのロシア語教育」、本学の大須賀史和氏（外国語学部特任助教授）の「Webベースの授業用教材の作成方法と今後の課題」、村田真一氏（上智大学外国語学部教授）の「メディアによるロシア語教育 ―ラジオ講座で学ぶロシア語」である。また、司会は堤が務めた。

臼山氏は、筑波大学の各学類（学部に相当）におけるロシア語教育について述べ、その中で特にロシア語を専門とする学生（人文学類言語学主専攻露語学コース）のためには、さらにロシアのサンクトペテルブルグ大学への留学プログラムを組み込むことで、教員数の不足による授業の多様性の不足などを補っていることが報告された（現地で取得した単位を読み替えることにより1年間留学しながらも4年間で卒業できるように構成されている）。また、筑波大学はロシア以外にも旧ソ連圏の国々の大学とも連携をはかっており、学生の留学が実施されている。これほど多くの旧ソ連圏の大学と交流をもっている大学は日本で他に見当たらないのではないかと思う。

竹内氏は、日本で唯一のロシア語専門課程をもつ高等学校である関東国際高校でのロシア語教育について報告した（関東国際高校には英語・中国語・韓国語の各コースも設置されており、来年度より東南アジアの言語のコースも設置されるとのことであった）。ロシア語コースの生徒は、英語を学ぶとともにロシア語を初歩から学び、ロシアへの5週間の留学・ホームステイを含む教育を受けている。卒業後進学は3分の1がロシア語を専門とする大学に進み、3分の1がその他の外国語・国際関係に進むとのことであった（実は、神奈川大学には、毎年外国語学部にこの高校からの入学者がおり、学部や大学としてもっと交流を深めてよい高校であると考える）。また、生徒に「トマティスメソッド」による聴覚トレーニングを実施しており、その効果についての報告もあった。

大須賀氏の報告は、本学言語研究センター共同研究「ロシア語教材開発の研究」による助成を受けている研究で、本学の外国語科目初級A・B用にFlashを用いて作成した教材についてであった（Flashは動画をあつかうソフトであるが、それを応用的に用いている）。学生が使用している書籍の形態の教科書の各ページと同じものがコンピュータ上にあらわれ、文をクリックするとその音声を聞くことができるようにプログラムされている。これは、Webでも利用できるが、実際は著作権上の問題もあり、一般的な公開はしていない。私もこのシステムを授業で使用しているが、シンプルで非常に使いやすい教材である。しかし、開発者の立場から問題や今後の課題があることが指摘された。それは、Web関連技術の特性を必ずしも生かしているとは言えないこと、学生の能動的な取り組みを支援する形にはなっていないこと、現行の方法では作成に時間と手間がかかること、教科書出版社などがWeb上に提供する供給者となり著作権上の問題を回避することが必要であること、などであった。

村田氏からは、ラジオ講座によるロシア語教育について報告があった。村田氏はNHKラジオ講座をかつて担当し、また2007年度に担当することになっている。ロシア語講座の放送の歴史、講師やロシア人ゲストについて、入門編・応用編のそれぞれの学習内容、テレビ講座との違い（テレビ講座は一般の視聴者の中にロシア語学習の裾野を広げるのがねらい）のお話があり、ラジオ講座の課題として、入門編・応用編を効果的につなげる中級講座がないこと、放送時間帯／時間配分の問題、双方向性の問題、学習目的の明確化の必要性、導入部の教授法の改良、の6つがあげられ、その解

決についての展望が述べられた。

全体討論では、活発な意見交換・情報交換が行われた。主要なものとしては、水上則子氏（県立新潟女子短大）より、携帯型デジタル音楽プレイヤーiPodをロシア語教育に用いているとの報告があり、近々ホームページに詳細を掲載してくださるとのことであった。また、林田理恵氏（大阪外国語大学）からは、関西で行われているロシア語教育研究会に関東からも参加してほしいとの要請があり、実現させる方向で検討していくことになった。井上幸義氏（上智大学）からは、最近のロシアでのロシア語教科書作成の情報があり、語形変化の豊富なロシア語ではテキストがおもしろい内容の初級教材を作ることが困難で（おもしろい内容にしようとすると高度な文法知識が必要となる文章になってしまう）、日本で教材を作っている我々も悩むところであるが、本国自体でもさまざまな苦労がなされているとのお話があった。

・

言語研究センター共同研究

「言語の普遍性と個別性」

岩　畑　貴　弘

本共同研究グループが言語研究センターに登録してから本年度で7年目を迎えた（ただし研究会としての活動の始まりはさらに数年遡る）。今年度も引き続き、研究報告会ならびに外部から講師を招いてのワークショップ（予定）を開き、それぞれの研究テーマに関連して活発な議論を繰り広げ、精力的な会をもった。以下が今年度開催した研究報告会の概要である。

本年度第1回研究報告会は9月14日(木)に開催され、本学に新たに赴任した言語学を専門とする教員に講演してもらった。1人目は国際文化交流学科の永原歩氏で、タイトルは「日本語ガ格の対象性をめぐる問題 ～朝鮮語の格助詞gaとの対照研究から～」。日本語のガ格と朝鮮語の格助詞gaの用法を対照しながら、日本語のガ格の対象性について考察された。2人目はスペイン語学科の菊田和佳子氏で、タイトルは「不定詞に対する無強勢代名詞の位置の変遷について」。中世から黄金世紀にかけてのスペイン語における不定詞と無強勢代名詞の位置関係についての実例を紹介し、なぜ現代に至るまでにある形式は用いられなくなり、ある形式は残ったのか、無強勢代名詞の配置のルールに変化をもたらした要因について考察した。3人目は経営学部の堀田隆一氏で、タイトルは「英語の複数形はなぜ -s か」。現代英語における複数形の -s が英語史の中で、どのように一般化していったのか、そしてなぜ一般化していったのかについて研究した成果について報告された。

第2回研究報告会は、10月28日（土）に開催された。1人目は本学国際文化交流学科の岩畑貴弘氏で、タイトルは「日本語の終助詞ネの考察」。発表では数多くの用例を挙げつつ、これまで言及されてこなかったネの振る舞いを見ながら考察した。情報の「共有」「同一性」をキーワードに、しかしその適用を今までとは少し変えることにより、かなりの用例が説明されることが示された。2人目は、本学英語英文学科の武内道子氏で、タイトルは「二つの手続きの記号化「ぜんぜん…ない」と「まったく…ない」はどう違うか」。日本語の同義的副詞として考えられている「ぜんぜん」と「まったく」が手続き的意味論の立場（Wilson &Sperber 1993；Blakemore 1986；1992；2002）から議論された。両者は共通してひとつの手続きを記号化していること、および追加的にもうひとつの手続きを「ぜんぜん」が記号化しており、そのレベルで二つの副詞は区別されるということが主張された。

本稿執筆時にはまだ開催予定であるが、3月に外部より2人の統語論研究者を招いて、ワークショップを開催する。黒沢晶子氏（山形大学留学生センター、ロンドン大学Ph.D.）には日本語の名詞修飾節に関して、中島尚樹氏（マンチェスター大学Ph.D.）には日本語の補助動詞のテアルについての報告をしてもらう予定である。

言語研究センター共同研究

大学生の英語相互行為能力の考察
—グループワークの会話分析—

(University students' interactional competence in English: Conversation analysis of group work)

細田　由利／デビッド・アリン

この共同研究では、英語教室内のグループワークにおいて学生同士でいかにして第二言語(英語)を駆使してタスクをやり遂げるのかを会話分析を通して検証している。

過去数十年間、相互行為仮説（interaction hypothesis）を通し、第二言語学習者に会話タスクを通して言語発信をする機会を与えることは第二言語での相互行為の促進につながると言われている。更に、研究者の中には第二言語での相互行為の機会を多くすることは学習者の第二言語習得につながると主張している者もいる（e.g., Long, 1981）。また他の研究者の中には、第二言語話者がいかにして会話資源を駆使して会話タスクを達成していくのかを示した者もいる（e.g., Markee, 1999; Seedhouse, 2003; Mori, 2001）。日本においても、学習者に第二言語での会話タスクを与えることの重要性が唱えられている。しかしながら、今日までグループワークにおける学習者の言語及び非言語行為を吟味した研究の大半は英語圏で行われており、日本の大学生を対象に行われた研究はまだ稀である。この研究では神奈川大学の英語の授業において、学生がグループワークで会話タスクを行う際に、いかにして言語及び非言語を駆使してタスクを達成していくのかを詳細に渡って分析する。特に、会話分析の手法を用いて学生の第二言語における相互行為能力、文法能力、流暢さを明らかにする。

今年度は、(1) 本研究に必要な物資の調達、(2) 本研究実施計画を立てるためのミーティングの実施（3回）、(3) 本研究に関連性のある分野の雑誌、本の購読、(4) 録音・録画・分析する2クラスの選択、(5) 上記で選択した2クラスにおける6グループ（1グループ4～5人）、計約6時間の録音・録画、(6) 上記データの詳細に渡る文字化及び分析、を行った。これまでの分析でタスク達成中のいかなる時に学生達が言葉の形式（form）、意味（meaning）、あるいはそれ以外（周囲のノイズ、物質など）に志向するか、などについて非常に興味深い結果が見られ始めている。

来年度は、(1) 引き続き文献研究、(2) 録音・録画・分析するクラスの選択（更に2クラス）、(3) 選択したクラスにおける4人のグループ、4グループの録音・録画、(4) 録音・録画したデータの文字化及び分析、(5) 分析結果をまとめた報告書（論文）の執筆、を行う予定である。

・

言語研究センター共同研究

Entrance Examination Research Group

入試問題研究グループ

2006年度、本研究グループは入試センターより04年、05年の2年分の入試データ（英語）を得た。2度のミーティングを開き、2名の新メンバーと以前からのメンバー1名に対し、統計分析ソフトWinstepsを用いるためのデータ処理の方法を指導することができた。1月と2月には04年、05年のデータの実際の分析を行うために1、2回のミーティングを予定している。その際、特に入試問題中の正誤判断問題がどのように機能し、意義をもつかに焦点を当てたいと考えている。

この研究は、長文テキストや設問の難易度、特定の問題の難易度と試験全体の信頼度に関して作問者にフィードバックを与えるものとして重要である。本学の志願者の英語力のより確実な評価のために、本研究グループが入学試験（英語）結果の分析を続けることは重要な意味を持つと考える。

＊･＊

言語研究センター共同研究

V.O.D.（ビデオ・オン・デマンド）システムに基づく
中国語自動学習教材の開発

加　藤　宏　紀

V.O.D.システムとは、ネットワーク内において複数のユーザーが動画の映像資料を個別の要求に応じて利用できる、サーバ・クライアントシステムである。今年度は、このシステムが整備された20-318などのCALL教室で、『情深深雨濛濛』（全46話）と『京華煙雲』（全44話）の中国語の連続テレビドラマ二作品を利用できる態勢を整備した。また、同様のサーバ・クライアントシステムを持つ中国語自動学習室では、当共同研究費でＬＡＮ接続方式の大容量HDDを購入し、システムの拡充を図った。これにより、上記二作品のほか、CS放送の中国語連続テレビドラマや言語研究センター所蔵の連続テレビドラマ合計八作品がV.O.D.方式で利用可能となった。

来年度は連続テレビドラマだけでなく、中国の社会問題を扱ったドキュメンタリーや討論番組、中国語歌謡曲などを取り入れ、質・量の両面からコンテンツの充実を図ると同時にそれを裏付けるハード面での整備を行う予定である。

＊･＊

言語研究センター共同研究

学術場面における話し言葉の分析
～上級日本語シラバスの構築にむけて～

富谷　玲子／高木南欧子

学術場面における上級日本語シラバスの構築のためには、日本語使用実態の基礎調査が不可欠である。現在、『日本語話し言葉コーパス（CSL）』（国立国語研究所）などのコーパスやデータベースは何点か公開されてはいるものの、大学内のゼミなどで行われる討論や、小規模集団による協同学習における話し言葉を扱ったデータはまだない。本研究では、大学学部生（日本人学生・留学生）の学術場面における日本語の話し言葉の使用実態の基礎調査・分析と、それに基づく上級日本語シラバスの構築を目的する。今年度は、分析に必要となる3人会話の分析方法の開発を行うことを目指し、主に3人会話のトランスクリプト作成作業の標準化を行った。2005年度に行った独話（スピーチ等）のトランスクリプト作成作業の標準化の規則は、音声特徴の差により、3人会話に適用可能な箇所と不可能な箇所があり、新たに3人会話独自のトランスクリプト作成作業の標準化をする必要があった。今後は、開発した3人会話の分析方法に問題点がないか検証、修正を行い、学術場面の話し言葉データの分析をすすめ、上級日本語シラバス構築への応用を目指す。